

ダイバーシティリレーエッセイ～様々なひとの多様な視点～

晩ご飯は私の仕事
It's my job to cook dinner

茂泉 健

共働きをしている家庭は多いと思うが、私もその一人である。当然、子どもの世話と家事は分担制で、朝の送り出しが妻が、夕方のお迎えは私の担当となっている。夕方早く仕事を切り上げる関係で、朝は少し早く出社するのだが、これが習慣になると意外に効率がよい。朝は会議もないし、新しいメールもチャットも入ってこないので、物書きや資料の作成など、集中してやりたいことに向き合える。朝のうちに当日のスケジュールを確認するので、その日の予定を改めて計画して、準備することができるのも結構助かっている。夏の暑い日や冬の寒い日に自分一人のために事務所のエアコンつけるのはちょっと後ろめたい気持ちになるが、後から来る人のために部屋を暖めて(冷やして)おくのもいいよねと勝手に納得したりする。最近は、大抵のことがパソコンで完結するので、何もわざわざ会社に来てやらなくてもいいのかもしれないと思いつつも、家にいると何かと家事が気になっていたりするし、子どもたちが早起きしてきたりしたらアウトなので、やはり早朝出勤は気に入っている。

とはいえる、なかなかうまくいかない日もある。会議が17時以降になることもままあり、そういう日は時計の針を見る回数が増える。保育園が閉まる19時までには絶対に迎えに行かなければならぬが、個人的な都合で議題を切り上げるのは気が引ける。「すみません、今日はここまで失礼します」と席を立つときは、とても後ろめたい気持ちになる。幸い会社から自宅までは車で15分程度と近いものの、そういうときに限ってやたらと赤信号に引っかかるような気がする。それでも、迎えに来た父の姿を見て喜んで駆け寄ってくる子どもたちの笑顔を見ると、急いで良かったという気持ちになる。

夕方早く帰る関係で、夕食の支度は私の仕事になっている。もともと料理は好きなほうだったので、あまり苦にはなっていない。iPhoneのメモに保存したレシピも200件近くになった。短時間で作るのでそこまで手の込んだものはないし、見た目に茶色系男飯が多いのも、家族には申し訳ないかもしれない。問題は買い物で、足りない材料があるときは、夕方、保育園に迎えに行ってからスーパーに行くのだが、子どもを連れて行くとお菓子やら百均のおもちゃやら余計なものをつい買わされてしまう。そんなにお菓子ばかりを食べさせるわけにはいかないので買うのは1人1個までと決めているが、そのせいで欲しいものを選ぶのにものすごく悩んで時間がかかる。結局帰宅が遅く、食事が20時を過ぎてしまうこともしばしばである。それでも、出張や学会で家を空けるときは妻がすべてやってくれるので、感謝している。困りごともあるが、そこそこ楽しくやらせてもらえていると思う。

子育て経験から気づいた多様性
Diversity I discovered through parenting

蘆田 茉希

娘たちの成長を見守るなかで「多様性」について自分事として考えるようになったのは、長女が年中のころのことです。園での集団行動が本格化し、時間を守ることやみんなと同じように行動することが求められる場面が増えていきました。小学校生活を見据えた指導であることは理解しつつも、子どもが「できない」ことで厳しく注意される様子には、戸惑いを感じることがありました。ある日のお迎え時、娘が支度に手間取り、厳しい口調で指導されている場面に出くわしました。下を向いて固まつた娘の姿に、思わず「もう帰ろうか」と声をかけてその場を離れようとしたところ、子どもができないことを親や本人の努力不足の問題として捉えるような雰囲気を感じさせる場面がありました。その瞬間、私は強い違和感を感じました。あのときの対応が正しかったのかは今でもわかりませんが、ただ、子どもの表情から目をそらすことができなかつたことを鮮明に覚えています。この出来事をきっかけに、私は、子どもが育つとはどういうことか、教育とは何を大切にすべきか、という問いに向き合うようになりました。関心をもって調べるなかで、「子どもは自ら育つ力をもっている」という考え方方に触れたとき、それまで心の中にあった違和感が少し言葉になったような気がしました。教育とは、何かを教えること以上に、子どもが安心して育つていける環境を整えることなのかもしれない。そんな思いを抱くようになりました。

現在、娘は小学生になり、学校生活を大きな困難なく過ごしています。年中のころに苦手としていたことも、時間とともに自然にできるようになっていました。子どもがもつ育つ力を信じることの大切さを、改めて感じています。もちろん、現実には人手や制約のなかで、多くの子どもと向き合う教育の難しさもあると感じます。子どもたちの多様な特性に丁寧に応じていくことは、現場の先生方にとって大変なことなのだと思います。そのなかで、扱いやすい子、扱いにくい子、といった見方が生まれてしまうことがあるとすれば、それは、教育の仕組み全体に関わる課題の一つなのかもしれません。

子どもとかかわるなかで得た「その人らしさに目を向ける姿勢」は、教育の場にとどまらず、社会全体にも必要なものだと感じています。できないことばかりに注目するのではなく、今できていること、そして一人ひとりのもつ可能性に目を向けること。そのような視点を大切にしたいと思います。まだまだ学びの途中ではありますが、誰にとっても少しでも生きやすい社会を目指して、自分自身も学び続けていきたいと思います。



「写真がないと可哀相でしょ」と次女が描いてくれた絵